

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月25日現在

機関番号：34410

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K01639

研究課題名(和文) 伝統芸能の指導・学習過程における「なぞり」の構造とその意義に関する研究

研究課題名(英文) A study on the structure and significance of "Nazori" in the instruction and learning process of traditional arts

研究代表者

迫 俊道 (SAKO, Toshimichi)

大阪商業大学・公共学部・教授

研究者番号：40423967

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は伝統芸能の指導・学習過程における「なぞり」の構造とその意義を明らかにすることである。学習者は指導者の模範的な動きを模倣する。指導者もまた学習者の動きの模倣を行おうとしている。それは指導者が学習者に間違いを気づかせるためである。「なぞり」と呼ばれる行為は指導者と学習者のどちらにも見られる。さらに、指導者は自分自身と学習者の動きを比較して、学習者が上手く出来ない要因をさぐっている。本研究では、このような行為を「さぐり」と命名した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「なぞり」とは学習者が指導者の手本の動きを模倣する行為である。本研究では指導者が学習者の動きを「なぞる」行為も確認できた。「なぞり」には相互性があるといえる。また、指導者が学習者の動きを「なぞる」ことが出来ない場合、指導者は学習者の躓きの要因を「さぐり」、学習者の身体への接近を目指していた。指導者が「さぐる」過程において指導者として育つ余地があり、学習者とともに育つ「共育」の可能性が浮かび上がった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the structure and significance of "Nazori" in the instruction and learning process of traditional arts. A learner imitates the leader's model behavior. The leader is also going to copy the learner's act. This is so the learner will realize and understand his mistake. The act called "Nazori" is seen in both the leader and the learner. Furthermore, the leader compares the movement of the learner to himself and investigates the factor that the learner does not excel in. In this study, this author names the search of the leader "Saguri".

研究分野：スポーツ社会学

キーワード：なぞり さぐり 伝統芸能 共育

## 1. 研究開始当初の背景

報告者はこれまでに日本の芸道の伝承者(指導者、学習者)の間で展開される相互作用に関して、文献研究から指導・学習に関する記述を析出し、その内容を分析するとともに神楽の参与観察から具体的な言動を映像資料によって記録し、また調査対象者へのインタビュー調査を行い、伝承に付随する事象を「段階性」という観点から分析してきた(科学研究費助成事業 若手研究(B) 課題番号 26750254、期間:平成26年4月から平成28年3月、研究課題名:芸道における身体教育の段階性に関する現代的意義-「生成論」の観点から-)。教育哲学者の生田久美子は日本の芸道の修練過程の特徴を「非段階性」と指摘しているが、段階性が生成されていくとも述べている(『わざ』から知る』東京大学出版会、1987年)。報告者は先行研究(「芸道における身体教育の段階性に関する一考察」『スポーツ社会学研究』第14巻、2006年)の中で、学習者の観点からは「非段階性」に見えるが、指導という視点では段階性が認められることを指摘している。

社会学者の亀山佳明は身体論を「定着論」「生成論」という独自の観点から整理している(『生成する身体社会学-スポーツ・パフォーマンス/フロー体験/リズム』世界思想社、2012年)。事物を外部からとらえて変化をとめて観察する方法を「定着論」と位置付けている。その一方で、亀山によれば動くものは変化し続けるものであり、その変化をそのままにとらえるには「生成」という観点から考察していく必要があるという。報告者は、亀山の「定着論」と「生成論」の理論的枠組みを援用し、芸道の「段階性」を「定着的段階」と「生成的段階」に分類した(「十二神祇神楽の伝承過程における2つの「段階」-定着的段階と生成的段階-」『<際>からの探求:国際研究の多様性』(文眞堂、2018年)。この研究では十二神祇神楽を継承する集団へのフィールドワークを通じて、神楽の伝承過程における2つの段階、「定着的段階」と「生成的段階」とそこで展開される指導の具体相を描き出すことを目的とした。十二神祇神楽の基礎的練習では細かく丁寧な指導を行う「定着的段階」が必要であるが、その後は学習者の自発的努力を待つ「教えない」教育が必要であり、それが学習者自身による創意工夫を生む「生成的段階」へとつながっていく。

「なぞり」という言葉は、「型をなぞる」などのように、手本や見本とすべき演技等を模倣する際に用いられる。尼ヶ崎彬は「なぞり」を「この真似は表面的な操作ではなく、いわば全身をもって能動的に遂行される典型事例の反復である。その目的は(あるいは結果は)自らその具現例を実現することによって、その「型」を身につけることである」(『ことばと身体』勁草書房、1990年)と説明している。尼ヶ崎は書道の稽古、スポーツのフォームの訓練などの具体例を挙げながら、「なぞり」に関して言及しているが、そこで見られるのは、師範、先生、上手な人、熟練者の動きを初級者や入門者が「なぞる」というものである。「日本の芸道で習得すべきものは、もともと単元に分割できるものでもなく、明確な言葉で目標を語れるものでもなく、ただ理想事例を手本にその活動の全体を身をもってなぞるほか仕方のないもの」(尼ヶ崎、前掲書)と表されているように、「なぞり」は学習者が指導者の模範例を習う際の方法として論じられてきた。2016年3月に行われた日本スポーツ社会学会第25回大会の学生フォーラムのシンポジウム(『気づかせる』指導とはどういうものか-コーチングの社会学にむけて-)においては、「なぞり」が中心的テーマの1つとして論じられた。そこでは、学習者だけではなく指導者の「なぞり」に関しても言及されており、「なぞり」の相互性は重要な研究課題として位置付けられている。

「なぞり」は、伝統芸能に限らず、様々な活動において見本とすべき対象を模倣する際に用いられる言葉である。神楽を習う者は、指導者の手本とする演技の動きをなぞろうとする。学習者の立場から伝統芸能の身体所作を獲得するまでの記述は民俗芸能の伝承過程を論じた先行研究においても見られる。しかし、管見の限り、指導者がどのようにして学習者を教えているのか、その具体的な様子を詳細に記述した研究はほとんど行われてきていないように思われる。指導者と学習者の「なぞり」の相互性を考察し、「なぞり」の構造を明らかにするためには、指導者の側から指導・学習に関する出来事を丁寧に記述していく営為が必要であるだろう。

## 2. 研究の目的

これまでに行われた先行研究から、学習者が新たな身体所作を獲得した瞬間において指導者は学習者に次の新たな段階へと進む課題を提示することがわかった。この段階性の生成には、指導者と学習者で展開される「なぞり」という独特の相互作用が影響していると思われるが、その構造については明らかにされていない。

本研究の目的は、伝統芸能の指導・学習に関する文献を精査するとともに、伝統芸能のフィールドへの参与観察を行い、伝統芸能の指導・学習過程における「なぞり」の構造とその意義を明らかにすることにある。

## 3. 研究の方法

(1) 伝統芸能の具体的な指導・学習に関する記述を含む著書、論文等を収集し、指導者と学習者の相互作用、特に指導者と学習者の「なぞり」に関する考察部分を整理した。文献の中で本研究に重要な示唆をもたらしたのは、亀山佳明「カラダを取り合うということ」『筑波フォーラム』第62号(2002年)、奥井遼『<わざ>を生きる身体-人形遣いと稽古の臨床教育学-』(ミネルヴァ書房、2015年)であった。亀山の論文はスポーツ実施場面などの具体例を挙げながら

「なぞり」の双方向性、相互性を見事に描出している。報告者は、「教える側の動きを教わる側がなぞる」という一方だけでしか「なぞり」という行為をとらえていなかった。亀山の考察により、指導・学習に関する記述についても「相互性」という観点から分析を行うことが出来た。奥井の著書は人形浄瑠璃のフィールドワークをもとにまとめられた書籍であるが、稽古の実践場面において、教えること、学ぶことについて緻密な記録が残されている。この著書に含まれている記述を「指導」と「学習」の両側面から整理した。また、指導者が学習者を具体的にどのように導いていくのか、この点に関する文献資料は伝統芸能の分野では先行研究が少ない。近年、スポーツにおけるコーチングは盛んに議論されているテーマでもあり、スポーツ指導に関する文献資料もあわせて参照した。

(2) 広島市西部の十二神祇神楽を研究対象として取り上げ、2016年6月から神楽の練習場面の参与観察を行った。本研究で参与観察の対象となったのは、広島県広島市佐伯区五日市町石内で十二神祇神楽を継承している石内神楽団である。報告者は神楽の練習会場に行き、指導・学習の場면을デジタルビデオカメラで映像記録した。フィールドワーク先にはノートパソコンを持参し、その日に行われた練習内容の概要を記すとともに、指導者や学習者の言動について記録を残した。

「なぞり」の行為に関するインタビュー調査を2017年に実施予定だったこともあり、インタビュー調査の質問項目を精査するとともに、収集された映像資料や練習記録から、「なぞり」に関連すると思われる場면을析出した。2017年8月に3名の指導的立場にある協力者にインタビュー調査を実施した。その際には、「なぞり」に関する映像を提示して質問を行った。主として用いた映像は、「学習者が指導者の模範演技を見てその後学習者がその動きをなぞろうとする場面」、「指導者が学習者を教えている映像の中で学習者の失敗や間違いを再現している場面」、「学習者が練習している隣で指導者が学習者と同じような動きを見せている場面」、以上の3点である。インタビュー調査のトランスクリプトはインタビュー調査後に作成を開始し、音声内容を文字として書き起こした。

(3) 文献研究、参与観察の記録、映像資料、トランスクリプトの精査を行った研究成果については、日本地域資源開発経営学会、日本スポーツ社会学会において口頭発表を行った。学会での口頭発表後の質疑応答を通じて、研究発表の内容を精査した。必要に応じて伝統芸能やスポーツ社会学分野において、専門的知識を有する者と本研究の内容について意見交換を行い、「なぞり」の概念や論点の整理を行った。特に2018年度は、スポーツ社会学を専門とする研究者らと、「なぞり」の行為をスポーツ指導やコーチングの具体的場面と関連づけながら、意見交換を何度も繰り返してきた。後述する「さぐり」という言葉は意見交換を通じて報告者が創り出した言葉である。

#### 4. 研究成果

##### (1) 学習者と指導者の「なぞり」

神楽の練習場面の映像記録から確認できたこととして、初心者に近い場合、指導者の模範演技をなぞろうとするが、基本的な動きであっても、動きのぎこちなさが目立つ。単純なミスの場合、指導者が練習を中断して間違いを指摘する。その際、指導者が学習者のミスやぎこちない動きと同じような動作を再現し、その後正しい身体所作の動きを提示した。この一連の行為についてインタビュー調査で尋ねた結果、「悪い型をまず先に見して、こっちが本当は正しいんだよって見比べさせて、本人に違いをまず認識してもらわんと直らんかなって思って」「自分がやっぱ、こういうやり方だったんだって、気づくと思います。舞っとる方としたら、自分がどういう形かって、たぶんわかんないんですよ」という回答が得られた。

以上のように指導者は学習者の動きを模倣することがある。指導者は失敗した所作と成功した所作を見せながら学習者に助言を与える。この過程において、学習者は自分の所作の至らなかつた点に気づき、舞の所作を修正していくことが出来ると考えられる。神楽の指導者は学習者の未熟な部分を見抜き、学習者の不格好な動きを再現し、学習者に「気づき」を促していることがわかった。亀山は前掲の論文において他者との相互作用が絡み合って成り立つ「なぞり」の具体的な構造を浮き彫りにしている。亀山は「互いが互いのカラダを取り合うこと」こそ、コミュニケーションの根本であるとし、自分が作り出している態勢は、相手の態勢に合わせながら行われていることを指摘している。つまり、「なぞり」には相互性があり、学習者だけではなく指導者が「なぞる」行為も考えられる。

##### (2) 指導者による「さぐり」

指導者が学習者の崩れた所作を再現できない場合、学習者に具体的な指示をする前に指導者が学習者と同じように神楽を舞い、自分の身体を用いて動作の確認を行い、学習者に対して具体的な指示を行う場面が見られた。この部分についてインタビュー調査で指導者に尋ねた結果、「違いを探すじゃないですけど、やっていくことで自分の中で、「あれ、なんかこうだったっけ」と思いながら、間違っとる部分をなんか一緒にやりながら探しよったんですよ。体に染みついていて分、動かにはあ、思い出せんっていうのがあるんですよ」「どこで苦労しているか、どこで躓いているかっていうのを自分もやることによって、どういうポイントで自分が意識してや

っているかとか、なぜこの動きが出来ないのか、というのをやることによって理解できる。このリズムで左足が入らにゃあいけんのに右足が出る、それはなぜだろう、というのを合わせてやることによって見えてくる。そこを見るためですかね。違和感探るときにやったりします」という回答が得られた。

指導者は学習者の未熟な動きをなぞろうと意図するが、学習者の身体のぎこちない動きをなぞることは容易ではない。指導者が学習者の動きをなぞることが出来ない場合、指導者は学習者の躰きの要因を「さぐり」、学習者の身体への接近を目指すのではないかと思われる。これは指導者が学習者の動きを模倣する行為ではなく、学習者の躰きを「探る」行為と推察される。指導者が学習者の身体所作に違和感を覚えたとき、指導者は自分の身体を用いて、何かを模索するような動きをする。このような行為を「なぞり」と対比する形で、「さぐり」と呼ぶことにする。本研究では指導者による「さぐり」の行為が見られたが、実際には学習者側が指導者の身体を「さぐる」ことも考えられる。この点については今後の研究課題である。

### (3)「なぞり」と「さぐり」研究の意義

奥井は著書の中で身体教育に関して興味深い指摘を記している。動作は「一度身につけてしまえば、出来ない状態に立って説明することが困難」となる（奥井、前掲書）という。ある所作が出来ることと、その所作が出来ない人を出来るように導くこと、これらでは必要とされるのは全く異なる能力である。指導者は学習者に教えようとする過程において学習者の技芸の習熟の状況をさぐる必要がある。「さぐり」の姿勢を持ちながら指導にあたることで、指導者として育つ余地があるのではないかと思われる。指導者が教えることの困難さに直面し、指導者として出来なかったことが出来るようになる、そのプロセスを緻密に記録していくことは、新たな指導論の創出にもつながるだろう。

スポーツの世界では性急に結果を求め過ぎることから体罰などの問題が指摘されている。「なぞり」と「さぐり」は身体を介したコミュニケーションの根源的要素でもあるだろう。「なぞり」と「さぐり」への着眼はスポーツ指導者にコーチングの在り方を再考させる契機にもなりうるのではないだろうか。

指導者が学習者に様々な身体所作を教えることは学習者を育てることである。その過程において、指導者が学習者によって育てられるという反転が起きる（学習者には指導者を育てるという意識はないかもしれない）。「なぞり」と「さぐり」という観点から身体教育の相互作用の構造を明らかにすることは、指導者と学習者の双方が、成長していく「共育」のプロセスを考察することに通じるとと思われる。

## 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計3件)

迫 俊道、伝統芸能の指導・学習過程における「なぞり」の教育的意義に関する研究、日本地域資源開発経営学会 第7回全国大会、2018年7月8日、京都大学(京都府)

迫 俊道、十二神祇神楽の伝承過程における「なぞり」に関する一考察、日本地域資源開発経営学会 第6回全国大会、2017年7月9日、広島県民文化センターサテライトキャンパスひろしま(広島県)

迫 俊道、伝統芸能の身体所作の指導・学習過程における「段階性」と「なぞり」に関する研究、日本スポーツ社会学会第27回大会、2017年3月17日、順天堂大学(東京都)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者氏名：迫 俊道

ローマ字氏名：SAKO, Toshimichi

所属研究機関名：大阪商業大学

部局名：公共学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：40423967